

優秀賞

小さな一歩

広島大学附属福山中学校 3年 加藤 里桜

私は、夏休みに中村哲さんの「天、共に在り」という本を読んだ。中村哲さんは、アフガニスタンの診療所に勤務した医師だ。診察所を運営する中で、彼は重大な事に気づいた。病院で治療している病の殆どはきれいな水によって解決されるという事だ。アフガニスタンは大旱魃による水不足に陥っており、汚水を飲んで下痢になり、命を落とす、という事例は珍しい事ではなかったのだ。中村さんは「健康は水から始まる。根本を直さないとなんも変わらない。」と考え、自ら用水路を建設することを決心した。一から用水路の建築の方法を学び、現地の人と協力しあい、25km に及ぶ用水路を完成させた。「現地の人々の暮らしが良くなる可能性が少しでもあるなら自分がやってみよう。」という、中村さんの強い信念と情熱をこの本から感じた。

今、日本ではアジアからの留学生を多く受け入れている。彼らは、アルバイトに勤み、学校生活と両立させようと努力している。しかし、その中には「出稼ぎ留学生」と呼ばれている人達がいることを、知った。母国の居住する地域には、生活を十分にまかなえるほどの仕事が無く、都市部での就労も難しい。生活が厳しい人達が大半だそう。母国の家族が貧しく、仕送りをしなければならない現実が、学業よりも労働を優先させ、目標大学への入学や就職もできないまま、帰国せざるを得ない学生がいることを知った。これを知り、私は去年の夏から、アジア人留学生に日本語を教える活動に参加した。少しでも力になれば良い、と思っていた。母国語である日本語を教える事はそこまで難しくないだろう、という気持ちもあった。

少し時間が経ち、私は自分の生徒となるティンさんに出会った。「日本の福祉施設で働きたい」という言葉が彼女の口癖であり、将来の話をする時、彼女の目は輝いていた。また、日本語を学ぶのに熱心で、わからないことがあれば「コレ、ドウイウイミデスカ。」と、すぐに聞いてくれた。しかし、最初の数回、私は彼女の質問に上手く答えることが出来なかった。「ごめん。わからないよ。」と、答えた時の彼女の残念そうな顔が頭から離れず、彼女との授業の時、質問に答えられるように、国語辞典をすぐ側に置くようになった。また、福祉施設で働くときに必要な言葉も、事前に調べるようになった。私の変化に気づいてくれたのか、彼女は学ぶことにより意欲的になり、段々と日本語を流暢に話すようになった。そして、1年後にその努力が実り、福祉施設への就職にも成功した。

今の私にできることは何だろう？中村哲さんのように大事業を成すことは、今の私には無理かもしれない。しかし、他国から夢と希望をもって、日本を頼ってきた人達を精一杯応援し、助けることはできる。「自分が動く事によって何かが変わる可能性があるならやってみよう」という信念、そして情熱を持ち、彼らと共に前進していきたい。